

## 満洲国移民の軌跡 (二) 仕事は非常につらくても、 希望に満ちた満洲の生活

●齊藤さん、満洲へ行く

昭和初期の農村にはまだ封建的な地主、小作の制度が厳としてあり、小作の二、三男がいくらあがいても、うだつのあがらない時代だった。そんな中、満洲へ行けば五町、十町歩もの広大な土地が与えられ、それがみな自分の所有になるというのだ。

齊藤さんは、さつそく両親に満洲開拓団に志願したいと話した。しかし、同じ大陸の中国との戦争に、村からも何人かの若者が出征していたから、そんな危険な所へなぞ行くのか、と親たちに真向から反対された。

しかし、齊藤さんの決意は固く、とうとう両親を説きふせると、昭和十二年九月末、移民事務を取り扱っていた県庁の「職務課務係」へ満蒙開拓移民団を志願した。そして、同年十月一日から十二月末日まで二カ月間、齊藤さんは南蒲原郡加茂町の加茂農林学校に設けられた「移民仮道場」に入所した。そこで電気

も水道もなく、冬は零下三十度を越す北満で生活するため知識や荒野開墾の基礎訓練を受けた。

翌十三年三月一日、齊藤さんは新潟からの第六次移民団二百余人とともに日満連絡船「満洲丸」に乗船し、新潟港を出港した。上陸地は羅津で、そこから満洲鉄道で牡丹江、

ハルビンと北上し、目的地の平安省通北県の五福堂に到着した。

五福堂は通北県の東方約六キロ、標高三百四十メートルの丘陵地帯であった。(地図を参照) 五福堂付近には、昭和十二年の第一次移民団をはじめ、すでに多くの移民が送られていた。第六次移民団入植で二

十六集團が入植したことになる。しかし、この二十六集團のうち、既耕地のまったくない純然たる未墾地(荒野)に入植したのは齊藤さんたちのほか二集團に過ぎなかった。注、既耕地とは、現地人から日本軍が強制的に買い上げた農地である。したがって既耕地への入植者は、農耕には楽ではあったが、後の日本の敗戦時に現地人のうらみをかうことになった。未墾の草原に五福堂新潟村(入植地)をつくるため、十二年六月に入植していた先遣隊員らの手で、どこに湿地があり、どこが耕地になり得な

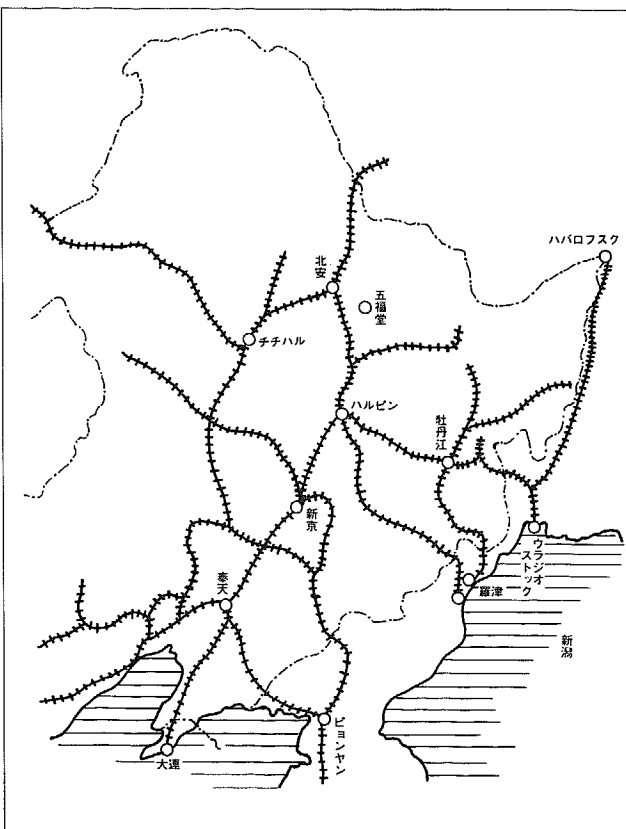
いかなどといったことが調べられ、さらに新潟村の配置も決められていた。齊藤さんを含む第六次移民団二百余人は、ただちに建設部、農耕部の二班に分けられた。建設部は住宅や学校、集会所などの公共建物の建設にとりかかり、齊藤さんの属した農耕部はディーゼルエンジン、トラクターを使って荒地の開墾に取り組んだ。



トラクターによる開墾

トラクター開墾は計画どおり易々と進んだが、表面の雑草の根が二十センチ以上もビッシリと張っていて、砕土を受けつけず、のちに苦勞することになる。

●満洲の荒野に水田をつくる 齊藤さんは農耕部員の中から水田部に編入された。それで、同僚十二人と寮から十きもはなれた「ホイルホ」という場所の仮宿舎(小屋)に泊り込みで、三町歩ほどの水田づくりに取り組んだ。標高三百四十メートルの五福堂で水田ができるかどうかは、日



五福堂の位置  
満洲国の首都は新京(長春)。  
五福堂はその北約500kmのところにあった。

るのがそのコツである。(四)土地の陸草のある所は、陸草は水に圧えられて次第に元気がそがれ、水稲が生長の戦いに勝ってくる。(五)福堂団史より) この方法で十三年春から水田試験が始められた。日本の

稲作とはまるで違った方法で、しかも肥料をまったく使わずに行われたのだが、反収一石五斗以上の収穫があったという。しかし、米の品質があまり良くなく、後に水田試験は放棄された。

当時、政府は満蒙へ送り込んできた若者たちへの妻を「大陸の花嫁」と呼んで、大々的に募集していた。後に齊藤さんの奥さんになるスイノさんはそのころ、岐阜県の紡績工場に働いていた。昭和十二年六月から十四年七月まで二カ年間の勤め

満洲での齊藤さん一家。昭和十六年七月、五福堂で撮影。スイノさんが抱いているのが長男の三栄さん。真中の農具は「カルチベタ」といって、鋤や鍬のようなもの。



村(現在、豊栄市)の実家に帰ってきた。そこに齊藤さんとの縁談が待っていたのである。政府の「大陸の花嫁」募集の呼びかけで、満洲への強いあこがれを持つスイノさんは、この話を聞くと、一度も会ったことのない三代次さんではあったが、どうしてもそこへ行ってほしいと親たちに頼んだ。親は最初、強く反対したが、親戚で働いていた三代次さんの弟がまじめな働き者で、それならということでも縁談がまとまり、満洲での生活が始まった。(前回参照)

●満洲での生活 齊藤さん夫婦の落着いた中蒲原部落は五福堂本部から六きほど東南の位置にあり、二十戸からなっていた。

さて、その住宅であるが、一戸が建坪およそ十五坪くらいの平屋で、図のように四戸ずつが棟続きになっていた。建物の屋根はやん草の葉でふかれ、側は草に泥をつけて柱にしがらみをして、厚さ一尺五寸くらいの壁の中にはペイチカといって空間が作られていた。炊事などの煙がその空間の中を通るようになっており、その煙の温度で室内の暖がとられるようになっていた。また、床下にも煙を通して部屋を暖めるオンドルという方法が用いられていた。こ

門風呂のようなものだった。齊藤さんたちが入居して間もなく、五福堂本部で抽せんが行われ、三代次さんに約六町歩の開墾地(まだ完全な農地でない)が割り与えられた。それに耕作するために牛二頭、馬一頭があずけられた。三代次さんはスイノさんに馬の鼻とりをしてもらい作付けに取りかかったが、開墾地とは名ばかりの荒地で、二人は非常に苦勞した。働きに来たのだから、スイノさんにとって荒地の開墾の厳しさは覚悟の上だった。また電気水道のない生活も、不況下の日本内地で体験済みで、そんな苦にはならなかった。ただ、夫の三代次さんが前に述べた試験田のため、ホイルホへ長期間、泊り込みになっていたもので、だれ一人知人のいない異境での一人寝は心細かった。その上、小興安嶺あたりから聞こえてくる狼の遠吠えが耳につき、眠れぬ夜が続いたという。